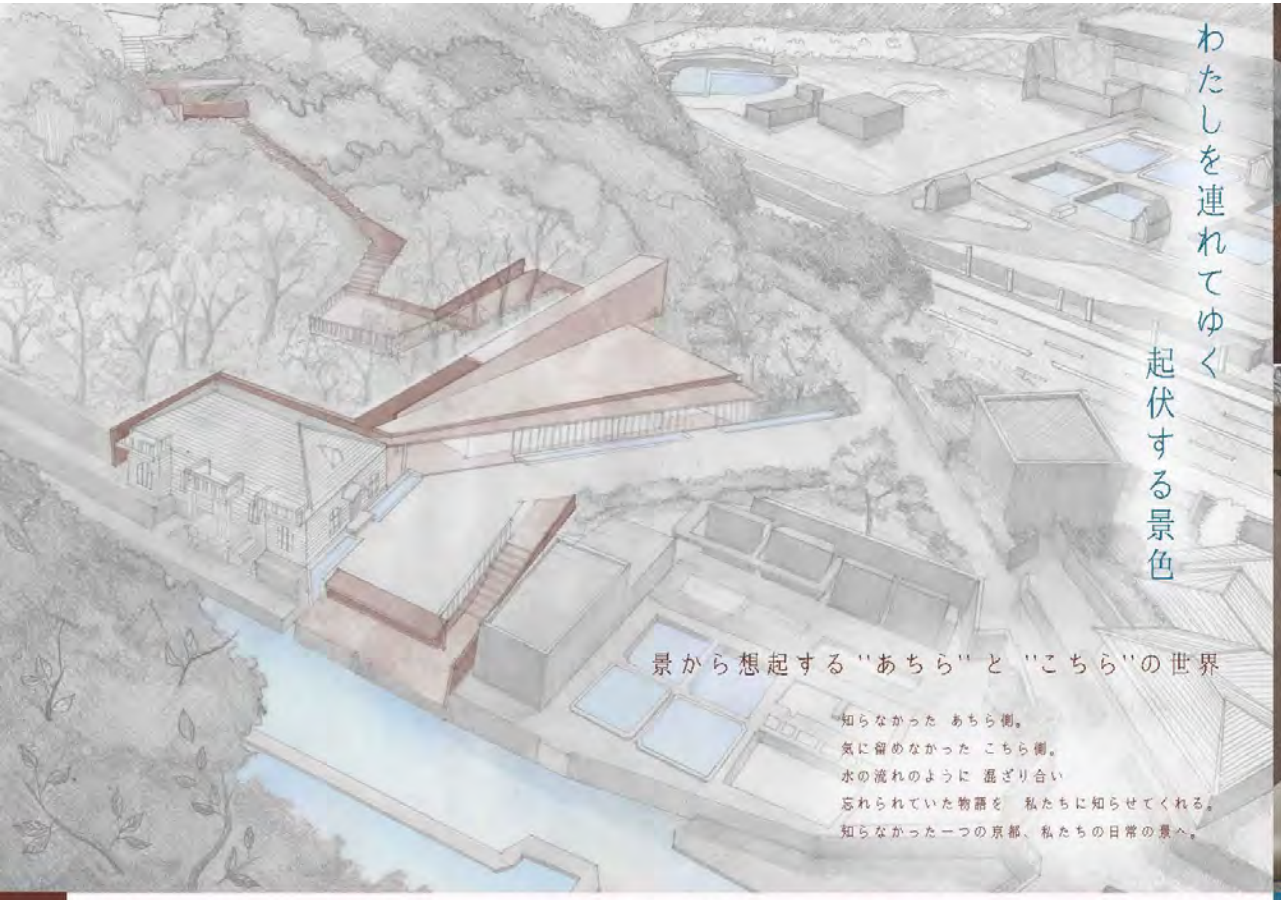


わたしを連れてゆく 起伏する景色

景から想起する"あちら"と"こちら"の世界

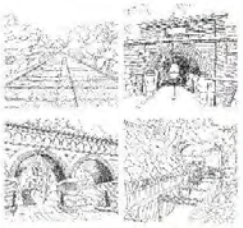
知らなかった あちら側。
気に留めなかった こちら側。
水の流れのように 混ざり合い
忘れられていた物語を 私たちに知らせてくれる。
知らなかった一つの京都、私たちの日常の景へ。

マクロな視点からのアプローチ

01 設計敷地

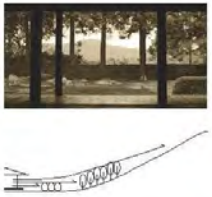
敷地は蹴上駅の北東に位置する九条山とそのポンプ室である。現在この場所は未利用地として放置されているが、今年、伏見と繋がった疏水の通船が行われ、この地の新しい使い道を考えたい。

02 点在する産業遺産



蹴上周辺では疏水にまつわる産業遺産が点在している。京都疏水の歴史を日常の風景として身近に体感する機会を設けるため、ポンプ室を含めた産業遺産を辿る散策ルートを全体計画とした。ポンプ室は中継地点としての、"道の駅"を提案する。

03 借景がつなぐ "あちら"と"こちら"

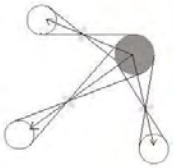


また、ルートでは辿れない疏水と関連した産業遺産も点在しているため、庭の"借景"を用いながら両者の場所を視覚的につなぎ関係付けた設計をしたいと考えた。
円通寺の借景を例に分析をおこなった。

04 借景の仕組みを考察

借景を構成する仕組みはレンズのようなものであると考えた。1は風景を切り取るフレームとしての役割。2は前の空間と後ろの空間の距離感を無くす"レンズ"の仕組みであることで両者を繋ぐ事ができる。

05 点在する産業遺産をつないでいく



1を連築で、2を九条山に自生する水々を利用して借景を試みる。この仕組みを利用することで九条山を拠点にしながらも、遠くに見える産業遺産もこちらへ引き込める。

ミクロな視点からのアプローチ

01 景色に至るまでのシークエンス

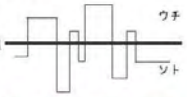
景色に至るまでの流れ、シークエンスを考えたい。庭と連続にによる双方の流出の仕方を参考にするために、四畳手前を例に景色に至るまでのシークエンスを分析してみる。

02 01から抽出される要素

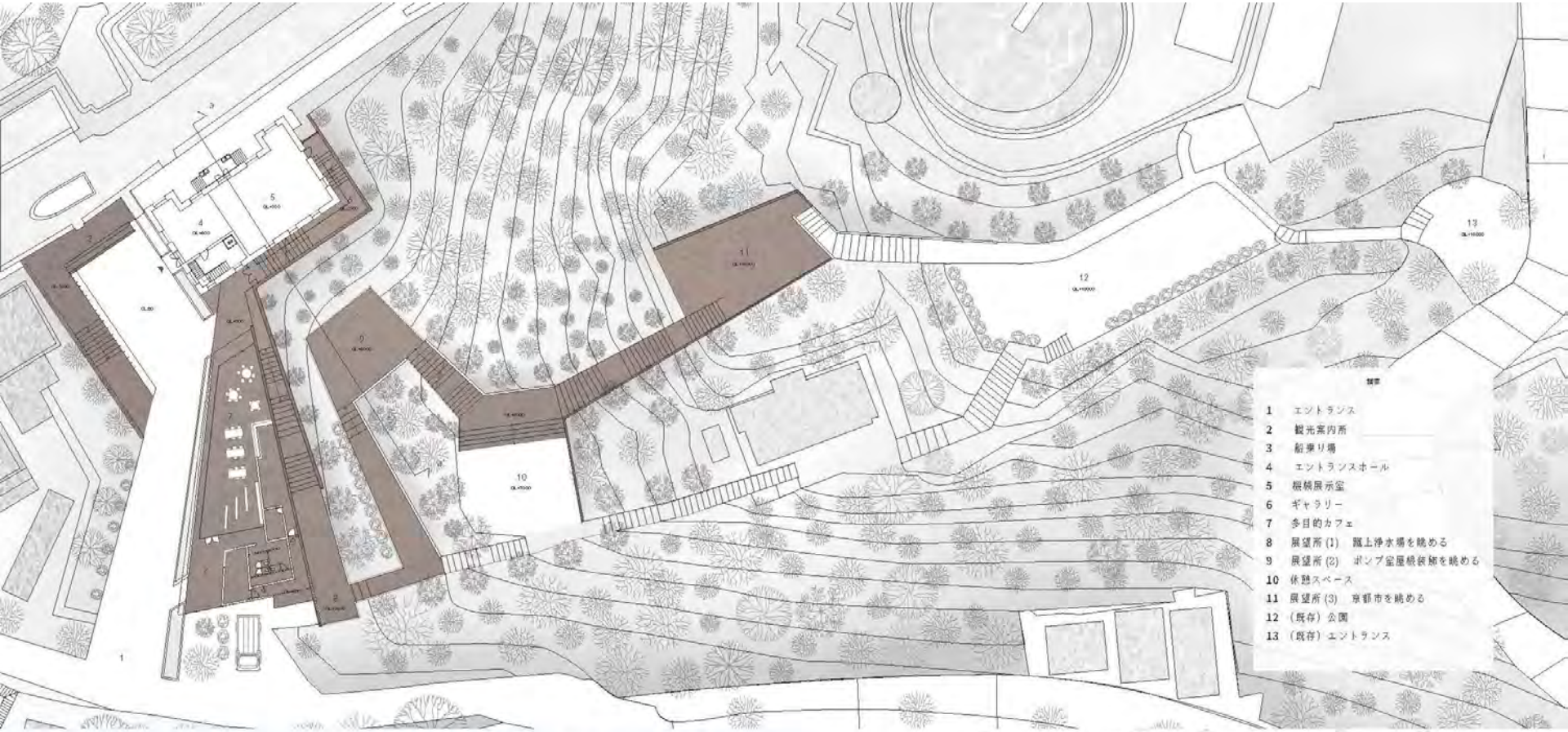
交互にくる 明るさ / 暗さ

一定の速度で歩いた時、明と暗が交互にくる。明と暗の間隔は狭くなったり広くなったりリズムのある明暗が見受けられる。
→シークエンスに明と暗を交互に入れる

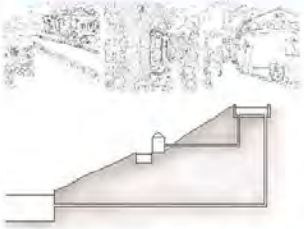
行き来する ウチ / ソト



建物を軸にウチ空とソト空を決めて行き、一軸を速度で歩いた場合にソトとウチが交互に反転していく。→ウチとソトを反転させた想定図を行う。



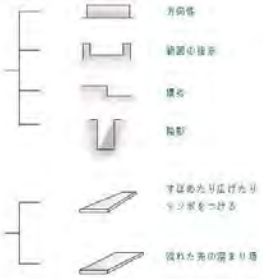
03 設計敷地のコンテクスト

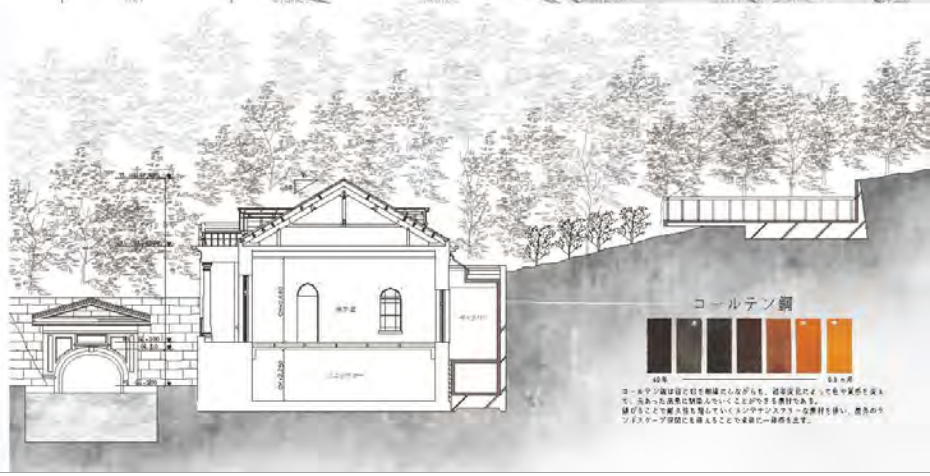


九条山ポンプ室は大正の頃に京都市内まで送水する目的で建設された。ポンプ室と九条山浄水場の高低差から、水圧を利用した放水を可能にし当時の文化財、高層建築までの高さで消火可能にした歴史をもつ。
ポンプ室と九条山の高低差、つながりを軸に設計をすすめる。

04 抽出される要素

05 02と04から導く設計手法





コールテン鋼は自己防錆されながらも、経年変化によって色や質感を変えて、古ぼけた表情を獲得していくことができる素材である。
錆びることで耐久性を増していくメンテナンスフリーな素材を使い、歴史のランドスケープ保護に貢献することや未来に一体感を生む。

箱庭の解放

～京都の大学のパブリックスペース化～

Background.

開発の進んだ都市

京都市内はあくなき開発し、長い歴史がある。市内には、数多くの寺社がある。町並も残っている。住宅地の開発も進み、土地に建物が密集している。

一方で、政令指定都市としては、3番目に公園の面積・数が少ない。

緑地などで憩える人が少ない都市としてこの状況は危惧である。

京都市内は上記した通り建物が密集しているので、大規模な開発は難しい。今回のテーマ課題において、既存の名のを利用してパブリックスペースを更の成すことが必要である。

京都における大学

京都は、古くから「学問のまち」、「大学のまち」、「学生のまち」として知られ、文化や産業の発展、都市による都市の活性化をはじめ、まちづくりに大学が大きな役割を果たしてきた。

大学は敷地内に十分なオープンスペースが取られていて、建物が密集している京都市内には貴重な存在である。

大学は敷地内に十分なオープンスペースが取られていて、建物が密集している京都市内には貴重な存在である。

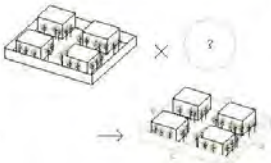
Concept.

大学 × 庭

大学という「器」に、まわりの環境の特徴を取り入れた役割を与えることにより、「庭」は町に解放される。

町に解放された庭は大きなパブリックスペースを作る。

新たな庭は大学と町をつなぐ空、大学は学生様・たくさん様・交流を産む場としてスケップアップする。



Element.

1.大学

町の新たなパブリックスペースの中心となる。

多くの大学は、豊かな緑・歴史的・広場がある。外部空間はいわば大学の庭だ。

しかし、この庭は大学内で完結されていて、町に開かれていない「器」である。

2.庭

町と大学を繋げる。

庭は、建物の様・様のある様・自然を感じる様である。日本人の伝統からはって離せない存在である。町と大学の間に新たな「庭」をつくり、大学の庭を繋げることで、大学が町の大きな庭へと変わる。

3.環境

庭のデザインを決める制約要素。

京都の大学のまわりは、山や川などの自然環境や、住宅など様々な特徴がある。庭が町と大学を繋げるためには、町に新設していくものと地域資のデザインが必要となる。

Site.

敷地は京都市内全域の大学を対象とする。

今回の課題ではその中からまわりの環境が特徴的でわかりやすいような二つの大学を選定し、ケーススタディとして検討する。

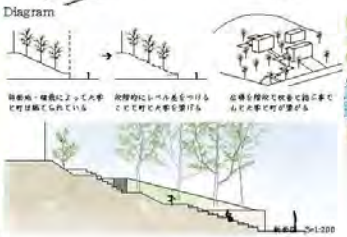
4つの大学の環境の要素として、「山」・「川」・「路（道）」・「寺（社寺）」を挙げる。

Case1. 山の庭

京都造形芸術大学

Proposal　山の踊り場

Diagram

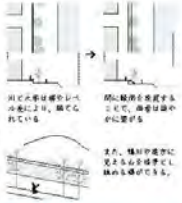


Case2. 川の庭

京都府立医科大学

Proposal　川と繋がる緑側

Diagram

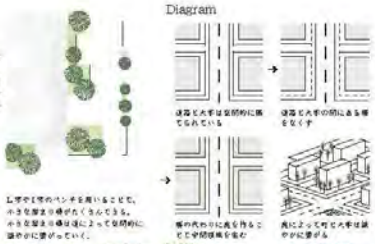


Case3. 路の庭

京都大学

Proposal　寄り道の溜まり場

Diagram

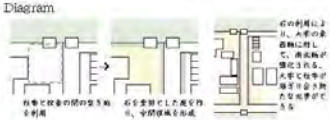


Case4. 寺の庭

同志社大学

Proposal　石の間の領域

Diagram



連鎖する生命の庭

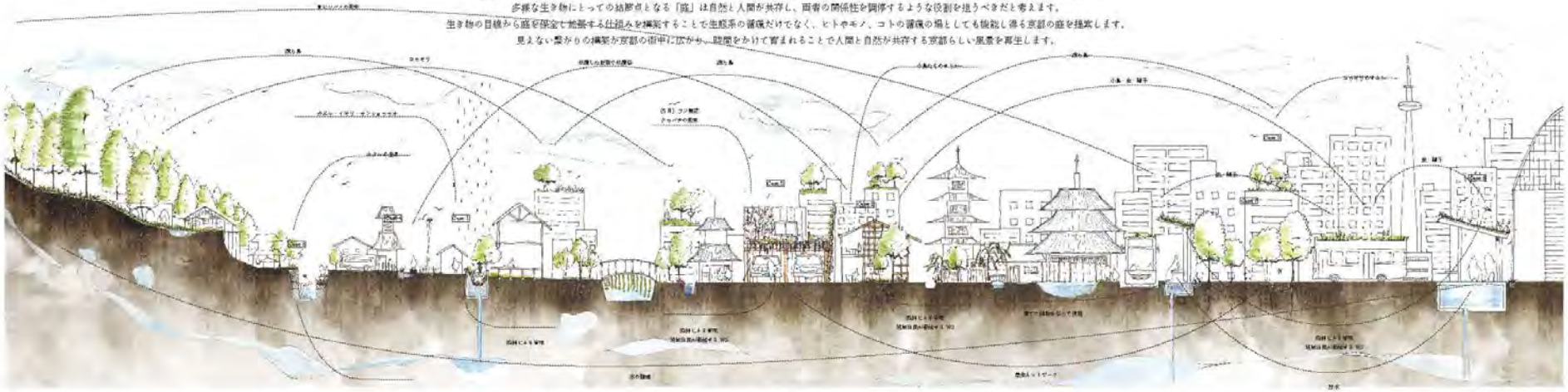
「草木国土悉皆成仏」

動物のみならず、1本の草1個の石に至るまであらゆるものに命の存在を見出す思想が、訪れた人々の心に残る京都の庭の風景を育んできました。

多様な生き物にとっての結節点となる「庭」は自然と人間が共存し、両者の関係性を調停するような役割を担うべきだと考えます。

生き物の目線から庭を解釈し然器する仕組みを構築することで生態系の循環だけでなく、ヒトやモノ、コトの循環の場としても機能し得る京都の庭を提案します。

見えない繋がりの構築が京都の街中に広がり、時間をかけて育まれることで人間と自然が共存する京都らしい風景を再生します。



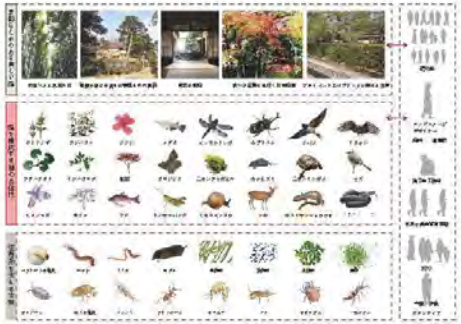
1. 計画背景

■ 京都の庭の変しゃや空間性を支える生命の存在

四季の変化によって生まれる地域的な変化、聞こえてくる水のせせらぎや草木の揺れ、竹筒から跳ね返り庭中に響く音、花の香り、砂や石ありてあると京都者には人間の感覚に訴えかけるようなたくさんの生命の存在があります。

京都の庭には古くは自然に対しる小規模な生き物たちが生息し、その調和や変化を観察することに向けられました。庭づくりに関わる人はさまざまな生命の特徴を知り、環境を生き物の棲みかとして適正配置して管理しています。庭は人から生き物、植物に至るまで多様な生命によって成立していることがわかります。

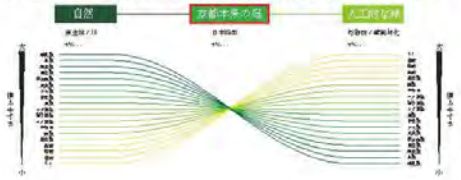
仏教の言葉で「草木国土悉皆成仏」という言葉があるように、動物のみならず、1本の草1個の石に至るまであらゆるものに命の存在を見出す思想が、訪れた人々の心に残る庭の風景を育んできたのではないでしょうか。



■ 多様な生き物にとっての結節点となる京都の庭

人間にとっても生き物にとっても居心地が良い環境が京都の庭です。多様な生き物にとっての結節点となる庭は自然と人間が共存し、両者の関係性を調停するような役割を担うべきだと考えます。

庭師の将来大きな庭を捉えた時に、京都市民の間（＝すべての生き物が対等に生きる間）づくりを行うには、生き物と庭師の仕事を通じながら、拡大する人工的な地で忘れられた人の感覚時に生命の存在を思い出せる仕組みを構築していく必要がある



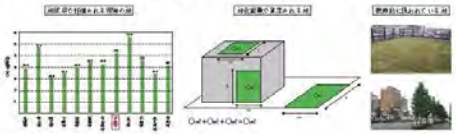
2. 問題

■ 人間が依存する結地としての庭

近年では結晶体で設置できる物質的な結地ネットワークの天然化など、技術の発達によって人間が手軽に自然を扱えるようになりつつあります。人間によって結節は計画、管理される庭は、近年の観光化・都市化によっていく中で観光化や商工業化などの開発の観点や目的とした「資源産業」という考え方」として商業に扱われている中の現状です。

京都の庭には、さまざまな植物や動物の棲みかとなる小さな庭、空間による生活の変化など物語性でとらえ観察と楽しさがあり、一般的な結晶体や商業庭で評価される庭の価値で評価されるべきではないと考えます。

人間が観賞した庭の評価ではなく、庭は的な目的で京都の庭を評価し、人間の都市的に生き物の特徴を加えた仕組みを用すことで、豊かな生命を宿した京都らしい庭の再生や市場庭の目的とします。



■ 生態系が担う4つの恵みと機能の低下

京都の庭を持続性ある結晶産業は時代とともに観光化や都市化が進行し結晶の中身変化が見受ち、それに伴い生き物たちの住処も変わっています。近年では結晶産業構造の変化や古くから受されてきた京の伝統的庭の機能の低下、地域の歴史を問題した伝統行事の衰退など、京都の庭を支えてきた生命の減少が人間への影響として目に見える形で現れつつあります。

1. 食文化への供給機能の低下

2. 観賞機能

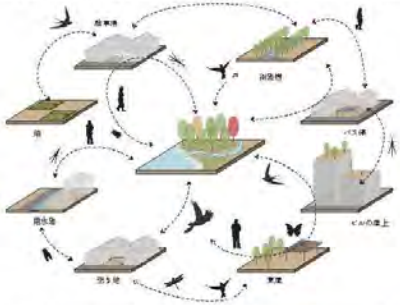
3. 文化機能の低下

4. 教育

3. 提案

■ 庭園を中心とした生態系ネットワークの構築

生き物が行動に移動するために庭園をとしてつながる物質帯（河川、道路）に整備される島嶼地、点在的に分布する庭園や神社、駅事務、市場など京都市内の様々な関係を結びつける必要があります。そこで京都市に点在する人間活動の場や生き物たちが、それぞれに適切な役割を果たしながら空間の島嶼を結ぶ結び目を担います。陸路パスポートは物質生き物の物流量を予測ちとした流域間で配置され、鳥や川、魚、人、車、ボイドパイプなどを結ぶとして大小の移動距離や空間的に異なったスケールで連結し、庭内の生態系インフラと繋ぐ、都市全体で庭内庭園を中心とする生命を宿した大きなネットワークを構築します。



鳥類	庭園に生息する鳥類	0m 100m 1km 10km	移動距離
鳥類	オオタカ、コゲラ、ハリ、ガイジツ	→	6km
小鳥類	ツバメ、ヒバリ、ムクドリ、ヒヨドリ	→	2~10km
虫類	ミツバチ、ハエ、ハエ、ハエ	→	2km
哺乳類	トンボ類	→	700m~2km
両生類	アカエリアオヘビ、ヘビ、ヒバリ	→	400~700m
爬虫類	カエル、トカゲ、ヘビ	→	500m~1km

■ 運営と仕組み / 自然素材を活用した庭園での庭師の新たな役割

庭師を主体とする地域住民を巻き込んだ運営・管理を行います。庭師は生息する生き物の調査を行い、その調査をつなぐための機材を調査し、その機材はすべて自然素材とすることで誰でも気軽に参加できる施工とします。機材が交換していく必要があるたびに庭師を巻き込んだ形を関与、生き物達が庭内の伝統的な資産保護を目的、伝統的な庭を行います。庭師は生き物と機材を調査しデザインする際に行政に対し、補助、協賛をします。行政はそれに対し生き物を自然素材の分布範囲や資源量の把握、調査を行います。

四季の移ろいにあわせて風景が移動が居ごとに変化します。それに合わせたイベントが開催されます。

4. 計画敷地

■ 目に見えない生き物のための回廊を都市スケールで構築する

京都市内中心市街地を対象とし、手の届いていない駐車場を接続した井戸など市内に散在しながらも閉ざされていない人間のための人工的な生き物が生息できる仕組として平を加えていくことによって、それらは生き物が来する点となり、他の場所にも接続して庭内の生息域範囲を拡大していくことで、生態系ネットワークで庭が全生き物の結節点となる日の興味がわかります。

人間の目には見えない繋がりの興味が京都の街中に広がり、時間をかけて育まれることで文化や産業、人間の産業活、街が活じる新しい市場、街いとして繋がる可能性があり、人間と自然が共存する京都らしい風景が再生されています。

Case 1　両生類が集う井戸

■ 敷地選定理由

枯渇した井戸を活用し、雨水を利用したビオトープを計画します。地下水に恵まれていた京都では今も井戸が残る町家は多く、暮し造りにマッチした京都の伝統的な水と生の共存に赤く点在しています。環境の変化により絶滅した井戸を対象として人間のために作られた人工物を生き物の住処にいくり変えます。

■ 効果

クライマー性の高い植物を小さな生き物に対して棲み易くします。水鳥が定住することで昆虫や魚が集まります。水の蒸発により上昇気流が発生し風が強い。排水の周囲の緑にも影響を及ぼし、採光や景観になる様な工夫が図られた町家の象徴を復活する役割を担います。行事は鳥の住処として利用されます。

■ 対象とする生き物

サンショウウオ/小鳥/イモリ/カエル/昆虫/ウザツカ/蛍

Case 2　小鳥が暮らす住居

■ 敷地選定理由

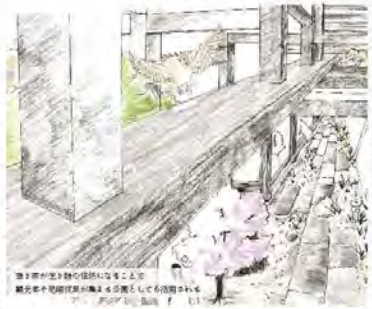
京都市でも空き家の問題があり、空き家は2008年に13%と増加傾向です。伏見区空家区の対策に使用する空き家を対象として、人間が住んでいない住宅を一般生き物の棲家として開放します。

■ 効果

廃棄を取り除くことで小鳥や虫が寄ける環境を作ります。既存の木造軸組は小鳥の棲家となり、春から夏の繁殖に適全で、無駄な音の閉じの無い方で刻々に新陳していきます。ヒトと生き物のテリトリーが小さい家屋の中で安全かつ快適に共存していく未来を提示します。

■ 対象とする生き物

サンショウウオ/小鳥/イモリ/カエル/昆虫/イロハモミジ/モッコク/ウメ



Case 3　コウモリの棲む屋上

■ 敷地選定理由

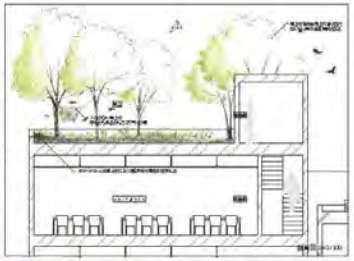
都市部では建物の中高層化が進んでいます。地上から10m～20mは高さにある屋上が殆んど、無用が続く空き地の住処を提示します。特に地震や台風、地球温暖化等が懸念されている今日にスポット性の住処の提案を示します。

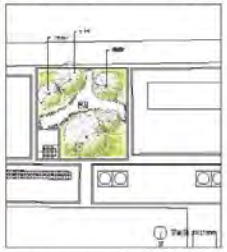
■ 効果

人工的な人間によっての屋上や空き地の住処として活用します。雨水や廃棄物の中を利用した屋上用庭をつくります。コウモリの住処とは無縁な地上までの間（平屋でもいい）に設置。なるべく自然の生息環境に近づけます。都内で多く残られる廃材を使用することで、無用空き地に必ずの中

■ 対象とする生き物

コウモリ/昆虫/鳥/ノラネコ/ハクビシン/ネズミ/絶滅種





Case 4　魚路の通る畑

■ 敷地選定理由

農業用用水路のコンクリート化に伴う生き物の減少を憂いです。水路・水田・畑の広範囲を生き物の生息環境としての一体でデザインする必要があります。農業に携われた経験を感かな地形で生まれることで、魚や鳥、虫が行き交う農村景観を提案します。

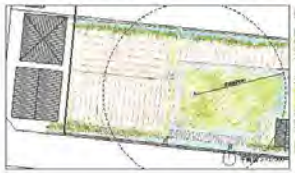
■ 効果

水路と水田や水田やつながっていくことで排水魚が生息できる環境を作り、再現する水路・畑でその魚を調達する魚の保護を行います。

魚の行動範囲の広がり。空き地とした空き地の営みを観察をして楽しむことができます。

■ 対象とする生き物

オオクチバス/ハゼ/ドジョウ/ボラ/コウノトリ/小鳥/カエル/サンショウウオ/小型昆虫/昆虫/甲殻類/淡水魚



Case 5　藤棚の駐車場

■ 敷地選定理由

都市の隙間が駐車場になることで、開発無数の標定されていない空間が増都でも見られます。この地方を家族でも見ることができる風景は京都にしか無無を感じています。お寺地で有名なっている駐車場の活用方法が見出されてきた無駄性を単に対し、5000×2500の広場で誘を利用した駐車を設置します。

■ 効果

都市が保留する駐車場の高い機能にし、環境面を毎回廃、空間を緑化オークションにすることで空間ビオトープとして機能します。4～5月になると藤棚の花が咲き、クマバチの誘引となり、無風質な駐車場を自然豊かな都市にしていくきっかけとなります。

緑化オークションは、採光を取り込みながらも住民のプライバシーを守るカーテンにもなります。

■ 対象とする生き物

鳥/クマバチ/昆虫/ナイカスカシバ/ヨウ

Case 6　虫の停留所

■ 敷地選定理由

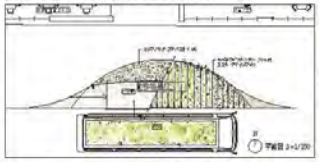
緑を見出した京都的いの点在するバス停は殆ん空間が点在しています。同じ思いでバス停が対面しているということ、都市に広く分散していることから、空き地の点在部分として活用します。バス停ごとのユニットを提案しますが、その提案が京都都市全域に点在したとき、都市スケールの生き物環境が可能となります。

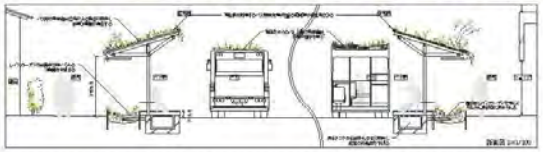
■ 効果

廃棄を緑化し、さらにバンステップや実現するための設備や設かしたレインガーデンをつくることで、生き物にとって住みよい環境を作ります。都市や都市周辺に散在し、心地よい休憩場所を作ります。このバス停のユニットが京都都市に点在することで、都市全体の保護を図ります。

■ 対象とする生き物

鳥/昆虫/リュウキュウヤ/セイヨウイヤンチン/ヤシュガ/スズキ/クマ





Case 7　鳥たちの遊歩道

■ 敷地選定理由

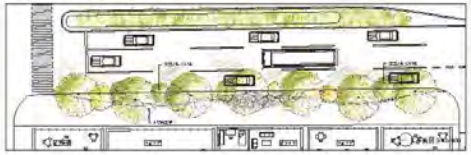
人工的に造られた街路樹は、決められたマスの範囲でしか空間がでません。また、道路との狭い関係の調整のため無理な形で造られた街路樹や京都都市でも見かけます。生き物の居場所とはいいがたい街路樹を提案します。

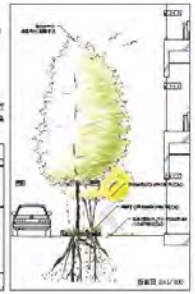
■ 対象とする生き物

鳥/昆虫/エゾ/ネ/ツバキ/トウカエデ

■ 効果

樹木が育ちと方法に大地に根を張ります。樹木の幹が太くなることで、都市の緑化による彩りや生き物の営みをより身近に感じることができます。既存の街路樹は鳥の止まり木となり、その間に植栽される樹木は鳥の好む木で構成されています。鳥が通ないを知らない要素が見えるでしょう。





Case 8　水辺の隠れ家

■ 敷地選定理由

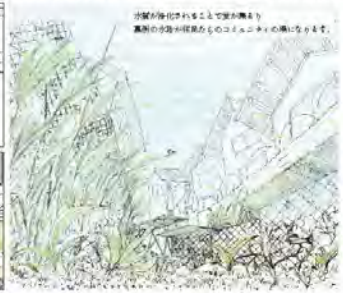
京都には多くの用水路が縦横並に広がっていますが、目を向けられていない住宅の裏側を通る用水路が多く存在しています。コンクリートで建設された用水路は陸と水の無駄や分断し、その間に生息する生き物たちは減少しています

■ 対象とする生き物

ルズミ/カエル/サンショウウオ/小型昆虫/淡水魚/甲殻

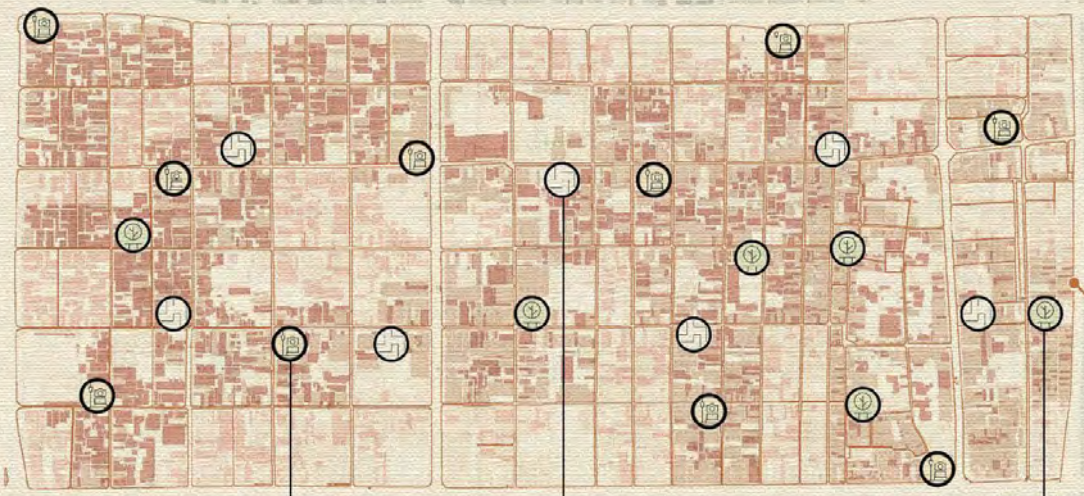
■ 効果

人工的に建設された用水路に段階的に植栽を設けることで、水の流れや外観から見た景観を守る機能になります。既存の住宅の小屋と隣がり、より身近に水辺や感じることができます。また、陸と水のゆるやかな関係を取り戻し、水辺の生き物が生きやすい環境となります。



庭の息吹

心に根付く緑



街角スペース平面図

回廊スペース平面図

公園緑地平面図

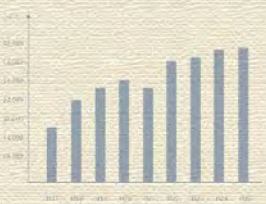
現状分析

京都は有名な観光地として通年観覧客が多い。観覧客は京都の文化に対する理解不足、観覧上明確なガイドとルートがない、荷物が重い、休憩できる場所が少ない、いつも同じ場所で集中しているなどの問題が挙れる。京都の住民からは観覧客による「交通がよく混んでいる」、「公共スペースがいつも使われている」等の苦情が出てきた。お互いへの理解が不足のため、衝突と矛盾が発生しやすくなる。

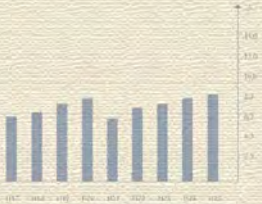
台風の目イメージ図

観覧客集め所分布図

台風の目は、台風の雲の渦巻きの中心部にできる、雲のない空洞部分のことである。京都有名な景観スポットもイメージ図を示した通り、町の周辺に分布している。敷地周辺には京都駅、商業施設、歴史景観スポットが点在している。敷地の中には、有名な観賞スポットと緑地景観がかなり少ない。



例年観覧客人数統計



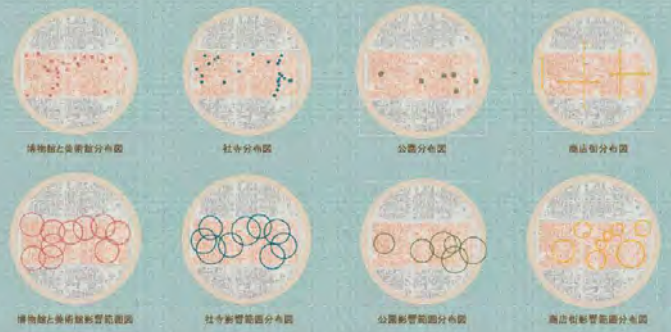
例年空き家率

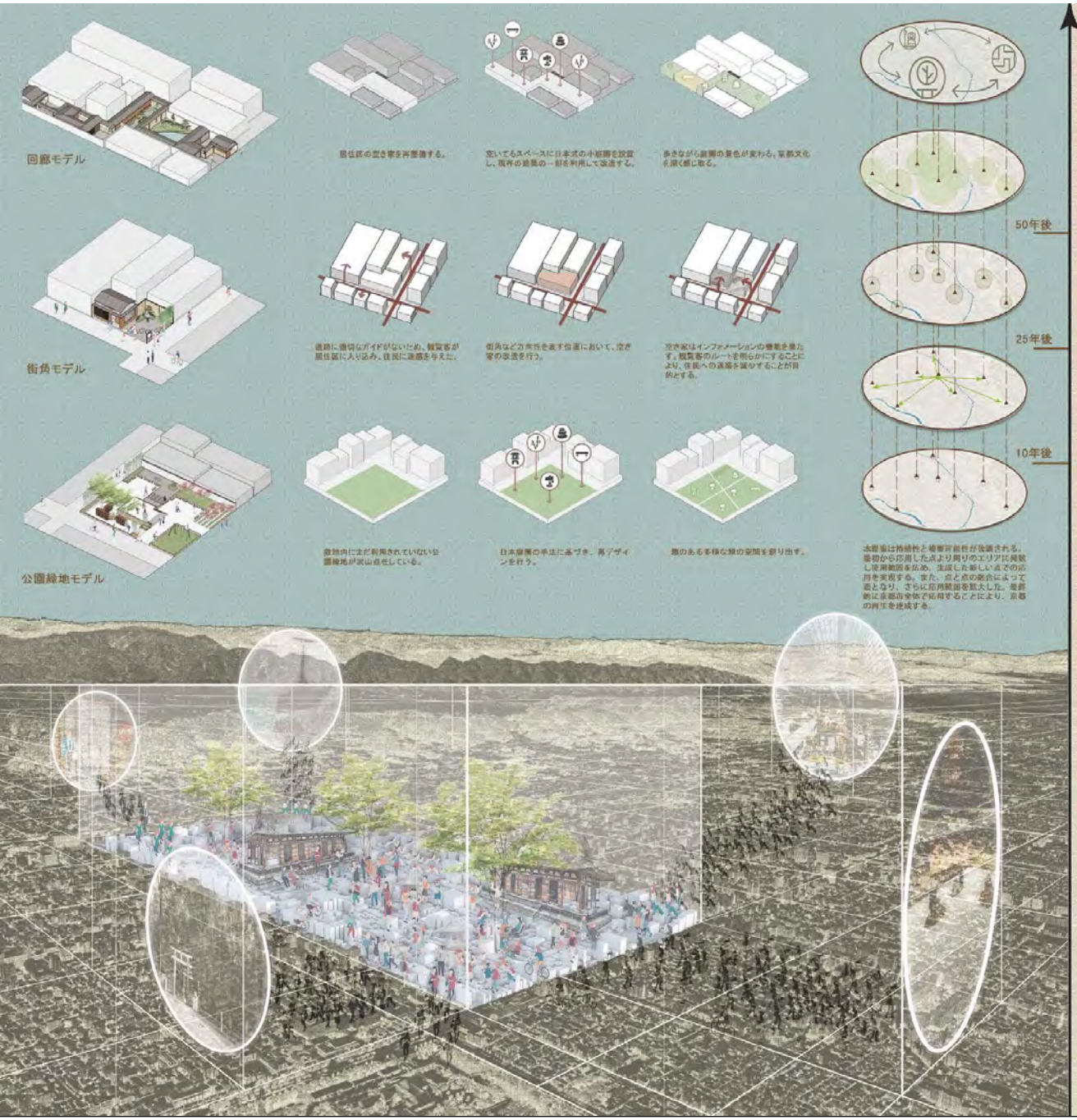
コンセプト

京都は、日本の古都として世界中に知られ、年間約8000万人の観覧客が訪れる世界有数の観光都市である。観光業が盛んでいる一方、京都の元住民から「観覧客が疑がしい」、「交通不便」、「京都本来の姿が「くくなった」などの苦情が出てきた。そのため、我々は、日本庭園本来の力を借りることにより、京都住民の生活スペースの維持を前提に利用率の低い空間を再整備し、新しい京都の景観を創り出す。従って、観覧客と元住民の矛盾の解消、最終的に精神の融合を達成し、京都再生の実践を目的として提案した。

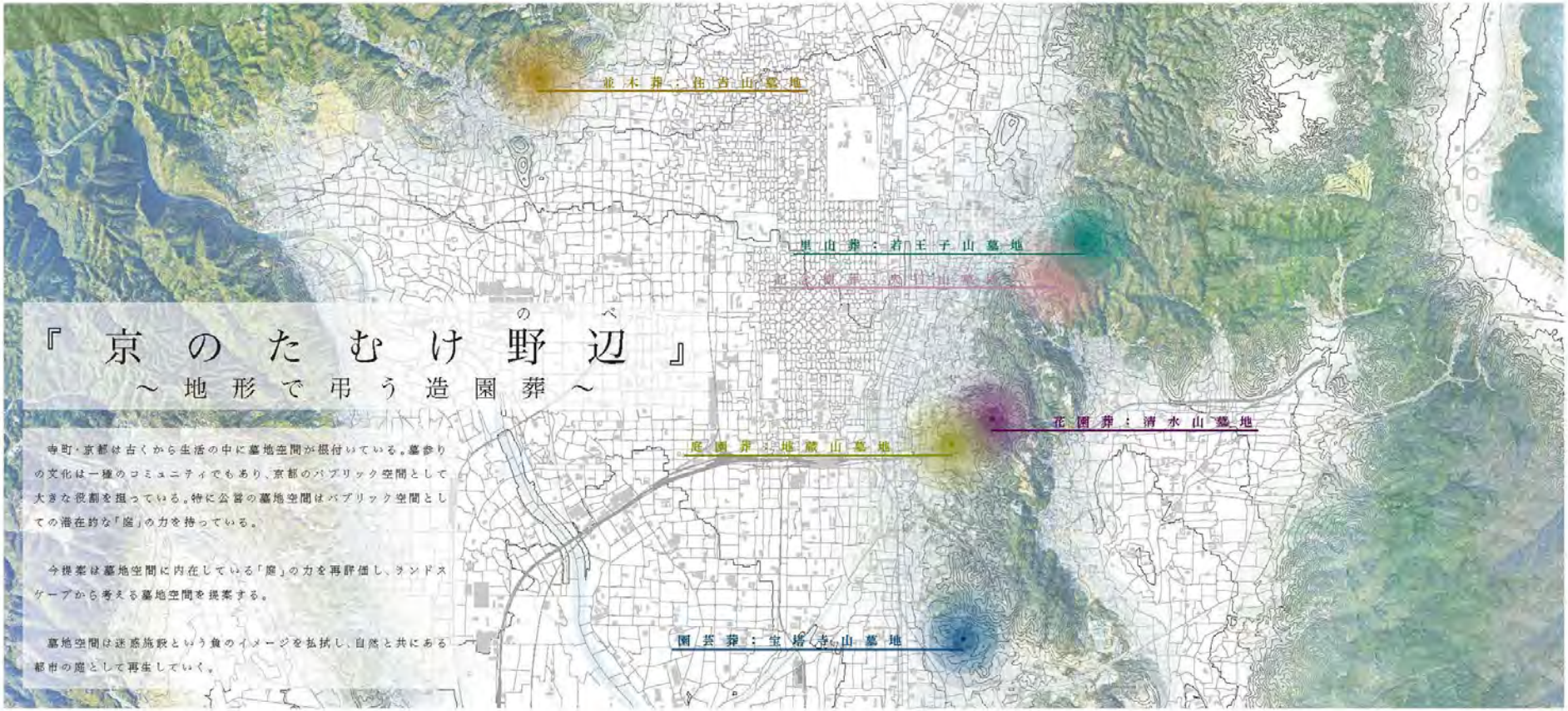
具体的には、現存の空き家、公園、町角を改造することを通して、庭園の力を「集め」、「浄化」、「融合」三つのパートで表現した。まず、どのパートもインフォメーションとして観覧客を「集め」、他のパートへの情報を提供し、観覧客がルートを自由に組み合わせることが出できる。次に、日本庭園の要素と空間表現を参考し「デザインに入れ、観覧客が散策しながら京都の文化と精を接触することによって心身が「浄化」される。さらに、京都住民の生活環境を改善し、お互い理解しさい、京都住民の一員として京都に融合「する」ことを目指している。最後に、この提案は一つのエリアのみではなく、京都市全体に応用できると予期される。

意識転換のイメージ図




回廊モデル
街角モデル
公園緑地モデル
50年後
25年後
10年後

回廊モデル
回廊モデル
公園緑地モデル
街角モデル
市民ワークショップデザイン
フォトスポット



『京のたむけ野辺』

～地形で弔う造園葬～

寺町・京都は古くから生活の中に墓地空間が根付いている。墓参りの文化は一種のコミュニティでもあり、京都のパブリック空間として大きな役割を担っている。特に公営の墓地空間はパブリック空間としての潜在的な「庭」の力を持っている。

今提案は墓地空間に内在している「庭」の力を再評価し、ランドスケープから考える墓地空間を提案する。

墓地空間は迷惑施設という負のイメージを払拭し、自然と共にある都市の庭として再生していく。

1．庭としての弔い空間

fig. 弔いの空間は同時に豊かな自然を感じる都市の庭でもある

多くの寺社仏閣を有する京都は神聖な安らぎのあるパブリック空間として生活者や観光客に豊かな自然環境を供供している。特に寺院の境内や庭園は豊かな自然環境として広く認知されているが、寺院は「墓参り文化」による墓地空間という自然環境も形成している。弔いの場は神聖な空間として人間生活において本来必要な都市空間である。

しかし一般的に墓地空間は迷惑施設と認識されている。寺社仏閣の多い京都の墓地空間を再考し「都市の庭」として再評価する。

2．京都市営墓地の現状

今提案では京都市営墓地における特殊性に着目した提案を試みる。近年の後継者不足や永代供養、維持管理費の軽減など時代の要請は、個人が運営する墓地や民間が運営する霊園よりも公営墓地への需要拡大に方向転換していくと考えられる。特に公営墓地はコストが低く、宗教宗派に関わらず埋葬が可能であり、社会の多様化にも適する。

また、その成り立ちは区画や造成が行われたものではなく、市民が自然発生的に開拓を行い形成。その地形的な特異性は自然環境と共にある墓地空間の可能性を大いに秘めている。少子高齢化による需要拡大と多様な社会の未来に向けた、京都市営墓地の更新の計画を行う。

fig. 自然発生的に生まれ地形に富んだ京都の市営墓地

3．埋葬の多様化と課題

近年の社会の多様化は故人の埋葬方法にも影響し、特に「樹木葬」による埋葬方法が注目される。一人あたりに区画された墓地による埋葬ではなく、植物を墓石として見立てた埋葬方法である。自然へ還るといった考え方や維持管理の容易さなどがメリットとして挙げられている。宗教の多様化、無縁仏の回避策として永代供養の形式もある。

fig. 多様化する埋葬方法の中で『樹木葬』に土地のセンスを取り込む提案

現代の価値観に合う樹木葬だが、一方でそのデメリットも想定される。『墓地空間に樹木が林立するだけでは故人の存在を感じにくい。』『市街地の樹木墓地は造成された敷地であり、自然に還る黒山の墓地とは異なり、結果として自然環境に対しての配慮が欠ける場合が多い。』

京都市営墓地の地形を継承した空間に着目し、ランドスケープから考える『造園葬』として樹木葬墓地のプロトタイプを提案する。

4．造園としての樹木葬

樹木葬は埋葬方法と樹種によってその埋葬形式を決定できる。本計画は、その土地固有の特徴を利用し、故人を弔う豊かな空間を獲得する、ランドスケープとしての樹木葬『造園葬』を提案する。

埋葬方法、樹木種別を体系化し土地のコンテクストと共に各々墓地空間での埋葬形式を考え、樹種を選定していく。また墓地空間を公共空間としての開き方を考えることで市民や観光客が日本文化としての墓地空間を体験。迷惑施設と認識される墓地空間を造園葬による「庭」の力によって京都の重要なパブリック空間として再生していく。

fig. 埋葬方法・樹木種別、地形的特徴を捉える『造園葬』

CASE 1　園芸葬

［宝塔寺山墓地］

《敷地》

稲荷山の傾斜地に位置する。宝塔寺を過ぎ、木々の生い茂る中にある墓地。市街地と稲荷山のエッジにあり、市民のアクセスが容易である。アクセス性が高く木々の落ち着いた空間が特徴である。

《提案》

森の中に故人の区画を設定し、すでに埋葬されている個人は墓石を樹木に順次移植していく。故人にゆかりのある樹種を選定し、年月が経つと森の中が豊かな園芸の場となる。永代供養ではなく、市民が手入れをし積極的に庭の維持に参加する。墓石による画一的な墓地空間は軽じて、園芸を通じて故人を弔う。

fig. 故人が眠る区画の樹木は森の中の墓地空間を彩る

既存の墓地区画を元に段階的に更新

『サルスベリ』
・ミソハギ科サルスベリ属
・落葉中高木樹

『ハナミズキ』
・ミズキ科ミズキ属
・落葉高木樹

『ウメモドキ』
・モチノキ科モチノキ属
・落葉低木樹

CASE 2　庭園葬

［地蔵山墓地］

《敷地》

市街地の中に位置する。周辺の地域的状況から墓地全体が白地になっている。アクセスのしやすさから利用者が多いと考え、墓地の許容数の拡張を想定する。また周辺に民家がある事からも、墓地空間と周辺環境への関係性の配慮が求められる。

《提案》

人々が集まる明るい憩いの墓地空間を演出するために敷地周囲に桜を植樹、中央を広場とした庭園形式の墓地を提案する。白地の上の広場は墓の暗いイメージから明るい憩いの広場となる。無縁仏の埋葬も兼ね、故人が人々の中で眠ることができる。

fig. 市街地から抜け周囲の桜に故人の思いを馳せ広場で語らう

外周の桜と白地が市街地との関係を調停

『ツバキ』
・ツバキ科ツバキ属
・常緑高木樹

『ツツジ』
・ツツジ科ツツジ属
・落葉低木樹

『サトザクラ』
・バラ科サクラ属
・落葉高木樹

CASE 3　花園葬

［清水山墓地］

《敷地》

幹線道路に面して位置している。地形的特徴と幹線道路との関係性から線形の敷地形状をしている。現状の墓地は傾斜があるため、道路や周辺環境に対して露出しており、墓地空間と幹線道路の関係性に配慮が必要となる。

《提案》

前面道路に対する墓地空間の振る舞いを考えアジサイの花畑による合葬墓の花園葬を提案する。道路に対して花畑がリエアに展開し、墓地空間が豊かな自然景観の振る舞いをする。今後、無縁仏の数が増加すると考えられるため、合葬墓の形式が適する。花畑全体を弔いの対象として墓地公園内を散策する。

fig. 道路に露出する墓地空間は墓石ではなく花畑に姿を変える

露出する傾斜地へ花畑が顔を出す景観

『シモツケ』
・バラ科シモツケ属
・落葉低木樹

『エゾアジサイ』
・アジサイ科アジサイ属
・落葉低木樹

『コデマリ』
・バラ科シモツケゾク
・落葉低木樹

CASE 4　記念樹葬

［大日山墓地］

《敷地》

京都市の東部に位置する公営墓地。蹴上駅からアクセスする形となり、琵琶湖疏水の「蹴上インクライン」をアプローチ空間として持つことができる。急傾斜であり、長いアプローチを通じて形成の開けた墓地空間へ至る。

《提案》

合葬墓として維持管理を統合する形式を採用。近年増加する無縁仏を記念樹に埋葬し、多くの人々と共に弔う。記念樹にはサクラを選定。大きな傾斜地を生かすと、開けた広場と大きな桜の木が伴む。暗い印象の墓地空間を開放感ある傾斜地で弔いの空間を構成し、墓地空間は今後の桜の名所として拡張される。

fig. 周辺地域のシンボルでもある桜を記念樹とした墓地広場

桜のアプローチを経て桜の記念樹に到達

『シダレザクラ』
・バラ科サクラ属
・落葉高木樹

『ヤマザクラ』
・バラ科サクラ属
・落葉高木樹

『ヒガンザクラ』
・バラ科サクラ属
・落葉小高木樹

CASE 5　里山葬

［若王子山墓地］

《敷地》

若王子山の登山道に位置している。その他の公営墓地が市街地と該地のエッジに位置しているのに対して、若王子山墓地は山の中にあり、アクセスが制限される。

《提案》

故人が自然に還る弔いの空間をつくる為に、個別葬の永代供養によって、山の一部になる空間を提案する。自然発生的な公営墓地は各区画も不定形で、長い年月を掛けて樹木葬墓地が森へ変容する。アクセスが困難だが、里山の一部として自然に還ることによって京都の生活者は、里山そのものが弔いの対象であると捉えることができる。

fig. 長い年月を掛けて墓地空間が森林に変容していく

里山へ還る故人を場所を超えて弔う

『クスノキ』
・クスノキ科ニッケイ属
・常緑高木樹

『カツラ』
・カツラ科カツラ属
・落葉高木樹

『ヤマツツジ』
・ツツジ科ツツジ属
・半落葉低木樹

CASE 6　並木葬

［住吉山墓地］

《敷地》

京都市北西部に位置する。山の斜面に対して直交する形で線形の敷地が広がる。敷地の最高地からは京都の町並みと山々が望める優れた景観を持つ。

《提案》

特殊な線形の敷地形状を活かして、秋に紅葉の並木道ができる並木葬を提案する。紅葉の樹木自体だけではなく、並木道として動線空間も弔いの場とする事でこれまでの墓地の許容数を増加させ、敷地内へ人々を引き込む。並木道と町並み、山が多層の景観を作り上げる事で、住吉山墓地固有の豊かな弔い空間をつくる。

fig. 並木の紅葉が弔い空間の道をつくり出す

並木道が豊かな自然と弔いの場へ誘う

『イロハモミジ』
・ムクロジ科カエデ属
・落葉高木樹

『ヤマモミジ』
・カエデ科カエデ属
・落葉高木樹

『トウカエデ』
・ムクロジ科カエデ属
・落葉高木樹

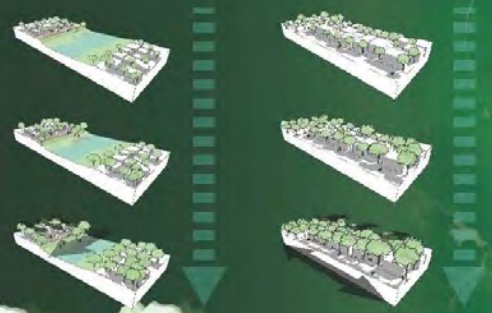
ただ洲に還る

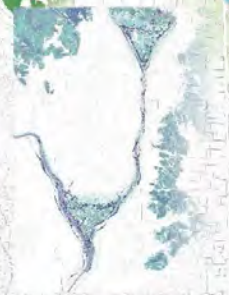
京都市左京区、神社を取り囲むように広がる糺の森はたゆまぬ管理によって、9000年の歴史を持つ落葉広葉樹林が維持されてきた。

その森は今、陽樹から陰樹に遷移しようとしている。この遷移を受け入れたとき、糺の森の優占種は常緑照葉樹になると考えられ、現在の落葉広葉樹は姿を消していくだろう。

本提案では落葉広葉樹林であった糺の森を逆デルタ地帯に拡大し、既存の土地利用を残しつつ、植物が持つリズム・鳥居前町が持つリズムとともに暮らす、
樹下空間のまちを提案する。

京都のまちは、オープンスペースが通り・路地を通って社寺境内に繋がることで構成されている。
樹下空間となった住宅地は糺の森との境界を溶かし、京都に住まう人々の庭となる。
やがて緑で満ちた逆デルタ地域は、様々な主体がプライベートを共有し、目に見えない中間領域が連続した「京都のまち」を形成する。





[illegible]川河川敷[illegible]すると、川が流れる方向に私的空間「緑廊」的空間の連続が生まれる。こうしてできた空間は、家屋の延長でありながら公的な役割を持った庭となる。

各住宅の庭に数本ずつ落葉広葉樹を植える。私有地の木々が生長することで私的な樹下空間が繋がっていき、敷地を超えた樹下空間はやが[illegible]から公的空間へと役割を変える。[illegible]と、[illegible]と、神社へと続く[illegible]空間が浮かびあがる。

鴨川デルタ地帯には大学や住宅地、下鴨神社をはじめとする観光地が多く存在するため、バス・地下鉄の路線が近い。バスは鴨川・高野川沿いを走っており、車窓からは糺の森が住宅地へ染み出していく様が見える。

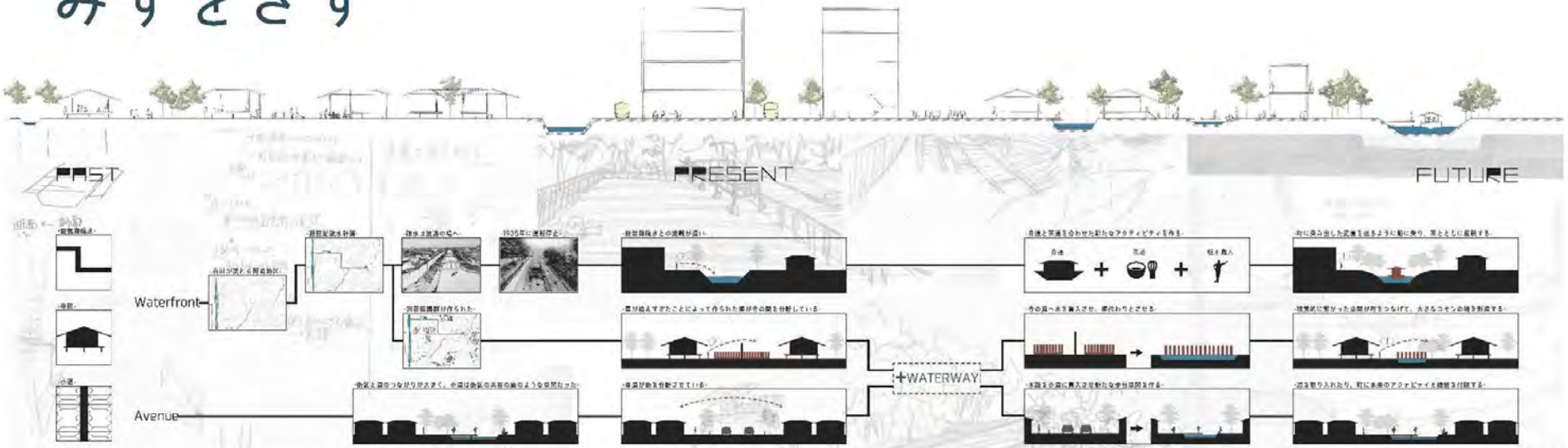
鴨川と逆デルタ地帯は、水を受けて下方へと流す漏斗の形を連想させる。元々河川の氾濫が多かったこの土地は、河畔林としてのポテンシャルを持つ。逆デルタは桂川・鴨川合流地点、桂川・木津川・淀川合流地点にも存在し、緑は下流へと広がる可能性も持っている。

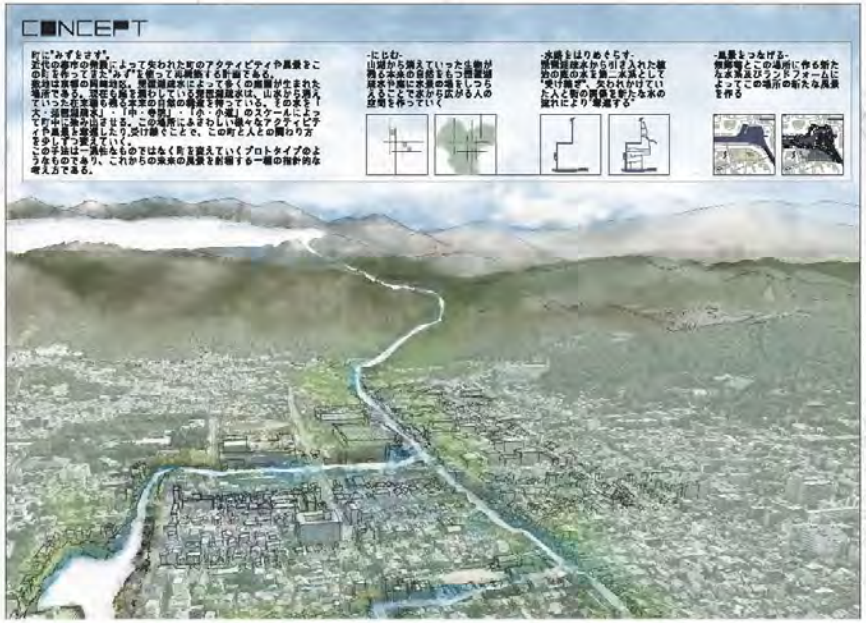
糺の森

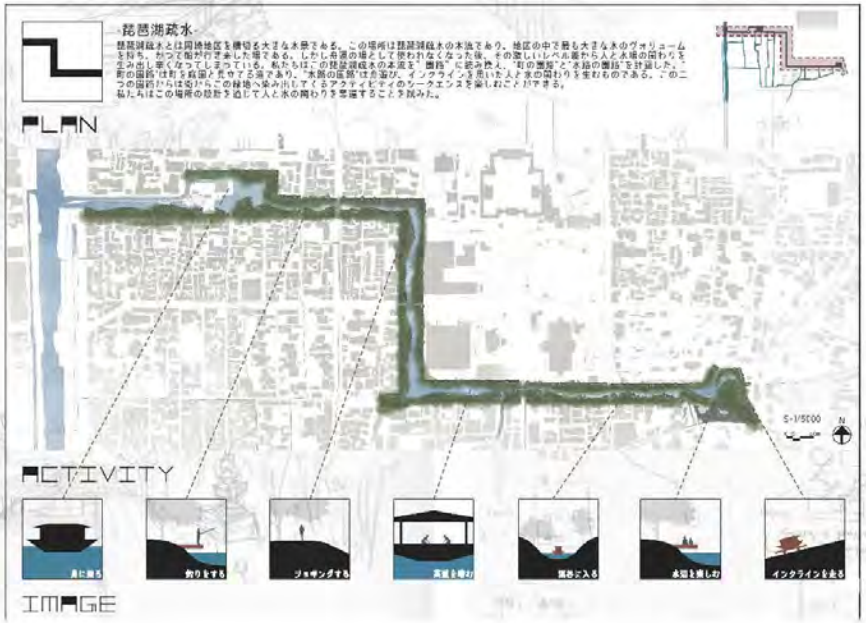
糺の森は植生遷移によって増加している常緑照葉樹の生長を受け入れ、住宅地では現在の糺の森の優占種である落葉広葉樹（ケヤキ・エノキ・ムクノキ）を育てる。糺の森の遷移と住宅地の木々の生長が進むと、季節により変化する葉の色、葉の数は元々の糺の森を浮かび上がらせる。
糺の森が植生遷移によって姿を変えても、近隣住宅地は今日の糺の森の植生を保ち続ける。

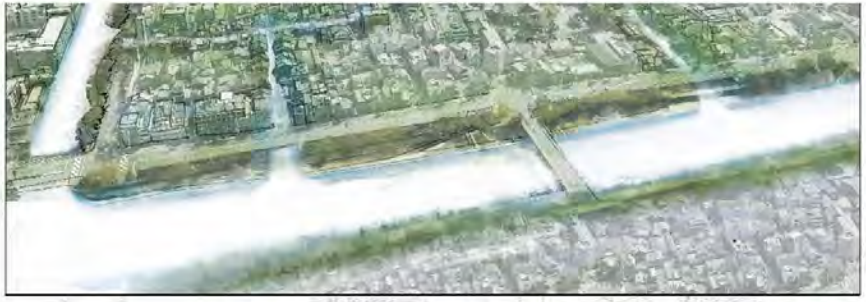
現在
S=1:400
20年後
S=1:300
照葉樹林へ遷移
ケヤキ等の落葉広葉樹が生長
デッキ
川に沿って延びる
高野川

みずをさす


PAST
PRESENT
FUTURE
Waterfront
Avenue
+WATERWAY


CONCEPT
町に"みずをさす"。
近代の都市の開発によって失われた町のアクティビティや風景をこの町を使ってまた"みず"を使って再興する計画である。
琵琶湖疏水は琵琶湖流域によって幾くの開墾がなされた地域である。琵琶湖疏水は、山水から流れていった伏流水を導く本来の自然の姿を持っている。この水を「大・琵琶湖疏水」・「中・寺院」・「小・小道」の3スケールによって町中に巡らせる。この場所にふさわしい様々なアクティビティや風景を登場したり、受け継ぐことで、この町と人との関わり方を少しずつ変えていく。
この手法は一気になるものではなく角を変えていくプロトタイプのようなものであり、これからの未来の風景を創造する一種の指針的な考え方である。
-にじむ-
山裾から流れていった自然が残る本来の良さをもつ琵琶湖疏水沿岸に水辺の場をいつくることで水から広がる人の営みを作っていく
-水路をはりめぐらす-
琵琶湖疏水から引き入れた様々の量の水を第二水路として"受け流す"、失われかけていた人と町の関係を新たな水の流れにより"再開する"
-風景をつなげる-
修復等とこの場所に作る新たな水景及びランドフォームによってこの場所の新たな風景を作る


-琵琶湖疏水-
琵琶湖疏水とは岡崎地区を横切る大きな水景である。この場所は琵琶湖疏水の本流であり、地区の中で最も大きな水のヴォリュームを持ち、かつて栄行きました場である。しかし今源の場として使われなくなった後、その美しいレベル差から人と水辺の関わりを生み出し辛くなってしまっていも。私たちはこの琵琶湖疏水の本流を"舞台"に絞り込み、"町の舞台"と"水辺の舞台"を計画した。"町の舞台"は町を高低と見せる場であり、"水辺の舞台"は水辺が、インクラインを思いた人と水の関わりを生むものである。この二つの舞台"からは切りこの場所へ流入出してくるアクティビティのシークエンスを築いおこと"ができる。
私たちはこの場所の歴史を通じて人と水の関わりを再興することを試みた。
PLAN
S=1/5000
N
ACTIVITY
船に乗る
釣りをする
ジョギングする
芝生を眺む
砂浜に入る
水辺を楽しむ
インクラインを走る
IMAGE

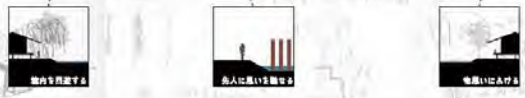


-寺院-

京都に残し続けている空間。隠すように住まい込まれたその空間を町の一部の空間として仕立て直える。家や区画を分けた堺を水路にコンバージョンさせて寺院の景観としつらえることで、日常的に楽しもが利用できるコモンの場を設けた。
この場所には町と寺院、人々がつくる新たな関係が出現する。

PLAN

ACTIVITY



IMAGE

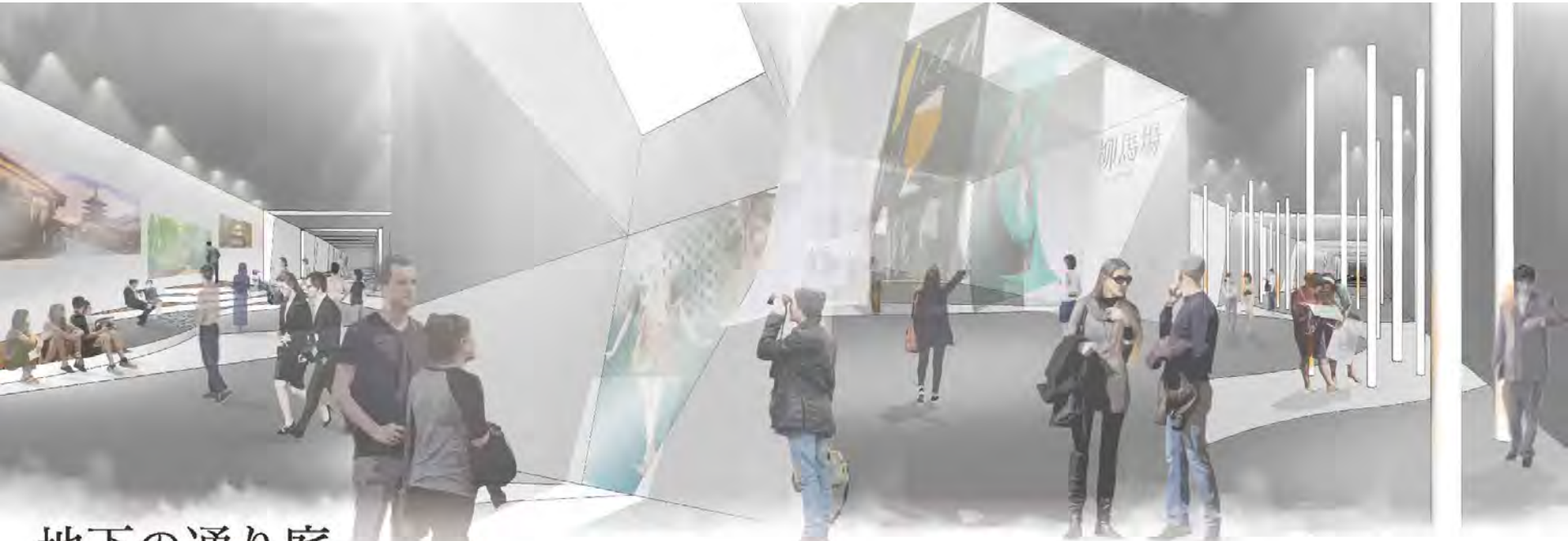
-小道-

小道は近所同士のつながりから町のつながりを作るものであった。しかし自動車の普及などにより、均質化された小道は人の往来するだけの「道路」となっていた。私たちは小道に絡む歴史から染み出すものを探って水路を消し、小道型の複数の共有の庭園空間を計画した。庭から染み出すものを探った大量がある町の小道は「道路」としてではなく、「場所」としての機能を強くなっていく。開発の部分から間に入るせせらぎの音は大通りにいる人々を誘い込み、古来からある小道がつくる風景を感じることができる。

PLAN

ACTIVITY

IMAGE



地下の通り庭

京都の四条通りには、河原町と烏丸をつなぐ地下通路がある。横断的に生み出されたここには、場所は存在せず、地上を示すサインによって地下空間での活動は受動的なものとなってしまっている。また、四条通りにおける歩道拡張によって、より地上が歩きやすくなったことにより、地下通路の必要性はどんどん失われている。

では今後地下はどのような価値を持つのだろうか。

私はここで京町家に多く見られる「通り庭」について着目した。

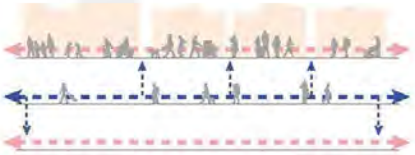
地上の喧騒から逃れつつ、四条通りの地上の多横断と建築的要素につながりながら、様々に展開される通りの環境に出会う「都市の通り庭」をこの地下通路に生み出すことによって、四条通りを貫く新しい京都の骨格を生み出すことができるのではないだろうか。

京都・四条通りの環境

四条通りは、新しいもの・店舗と、京都名所へ向かうバスなどの交通網が集まり、京都の一番の繁華街として栄える拠点である。そこには、観光客や市民も含め、様々な目的の人々が集結し、自身の目指す場所へ向かう。その多横断・多要素性は、大きな賑わいをもたらすとともに、都市の喧騒と要素の混在を生み出す。またこの要素の混在によって、場所におけるシンボルを失い、拠点の中で滞留することはなく、移動が主体となっていく。人々は流れのまま立ち止まることはなく情報は遮断され、この場所の魅力を感じることはない。

四条通りは、人々は集結しつつも通り過ぎるだけの場所となってしまいつつあるのではないだろうか。

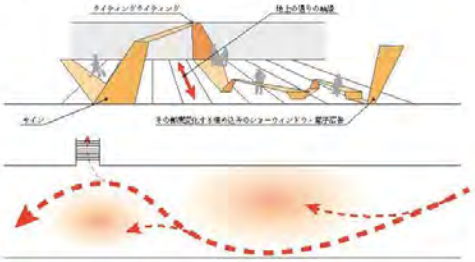
地下通路の環境



河原町と烏丸をつなぐ地下通路は、駅周辺、点在するバス停などの交通網や商業ビルをつなぐ通りとして存在している。

しかし、地下空間によるわかりづらい方向感覚や閉鎖感、通路という横断性のみな空間性から、ここには「場所」というものは存在せず、空間的認識は存在しない。地上の賑わいと繋がるために作られたこの「空場所」は、サインによりその行動意識を補っているが、それにより地下空間での活動は受動的なものとなっている。さらには四条通りにおける歩道拡張によって、より地上が歩きやすくなったことにより、地下通路の必要性はどんどん失われているのではないだろうか。

環境軸としての「京町家の通り庭」と「都市の通り庭」：デザイン骨格



海は、目的地（観望）や建築的用途、そして人といった混在する要素を横断的に、無横断的に繋いでいる。またこれらの要素の混在は、いる人に新しく自由な出会いと発見を与え、それらの経験による「場所性」を生む。

特に「京町家の通り庭」は、うなぎの寝床と言われる奥行きの長い町家の、外から室内・奥庭までと、採光や室内での庭や座敷などの多横断性と要素をつなげながら、様々に展開される劇場機構を構築している。いわば場所の骨格となっている。

この建築スケールでの機構骨格は、四条通の地上と地下の関係においても大きな骨格となり得るのではないだろうか。

場所とは、都市の形態基盤として、不変的なインフラがその時々に変化する市民のライフスタイルや人々の活動など多様多様に変化する都市形態に対して流動的に寄り添い変化し、人々に断続的・連続的な活動を生み出していくような新しい要素となる空間体験を生み出す骨格となるものであると考える。また現代において、変化する都市スタイルの基盤となるのは「情報」ではないだろうか。

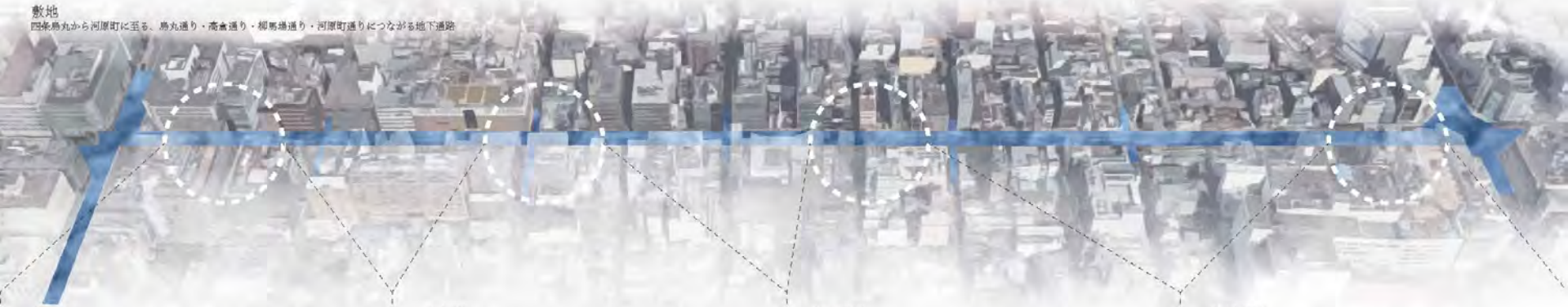
通り全体のデザイン骨格として、ストライプによる通りの軸線とそれを巻き込む「情報の帯」、そして「流れと溜まり」のパターンの動線計画により、今日での様々な情報と活動の出会いと発見が生まれ、地下空間は都市への新しい接点となる。また、河原町から烏丸へ至るシークエンスの変化によって、地下通路は変化する京都の「都市の通り庭」として、時代をつなぐ一本の通りとなるだろう。

流れと溜まり×気配との繋がり

場所には必ず光や風といった自然や、過去、そして様々な人の環境が生み出す気配がある。それらの気配が、都市の特徴と空気を作り上げる。しかし現在の四条通の混雑・喧騒の中では、これらの要素は意識しづらいものとなってしまっている。今回は４つの南北軸の通りをピックアップし、これらの要素とつながる、移動による流れ・出会い・気づきによる溜まりを生む空間計画を行う。人々は目的地へ向かいつつも四条の気配に気づき立ち止まり、また自身もその空気を作り上げる都市の一部となるだろう。

敷地

四条烏丸から河原町に至る、烏丸通り・高倉通り・柳馬場通り・河原町通りにつながる地下通路



烏丸通り

多くの行き交う人の流れに対するように生まれる駅前の人の滞留。ふと腰掛けるステップによって初めて触覚による素材感を感じることができる。パッチワークのように敷りばめられた素材から自身のパーソナルスペースを選択することで、夏は冷たい石材、冬は冷たない木材など季節やその人の感覚によって風景は構築される。

「かるすま」の語源は「河原の洲（砂州）に接した土地」を意味する「川原洲脇」（かわらすま）だと考えられている。川に接する砂のように、人々は選択しつつも過去の河原の洲の気配を生み出す風景を構築するものの一部となるだろう。

高倉通り

太陽の光は、視覚的に人に時間や季節、そして方角を伝える。光がもたらす情報は計り知れないものだろう。

しかし京都四条通りにおいて、密集する高層商業ビルにより、空はかなく区切られ上を意識することは少なくなった。

しかし空がなく低い天井の薄暗い地下通路において、ふと高くなる天井とほのかな光は、地上と地下を繋げ、地上以上に空への意識が向くのではないだろうか。光の色は時間により変化させる。突如高くなる穴が空いたような天井に人は立ち止まり上を向く。日々変わる光の気配に気づく場所となるだろう。

柳馬場通

1589年、二条通との交差点付近に『二条柳町』という、当時日本一の遊郭が設けられその周りには綺麗な柳の並木が形成されており、柳馬場通りの由来ともされている。柳は風の流れによって見えない自然の気配を生み、その揺れが空間を生み出す。

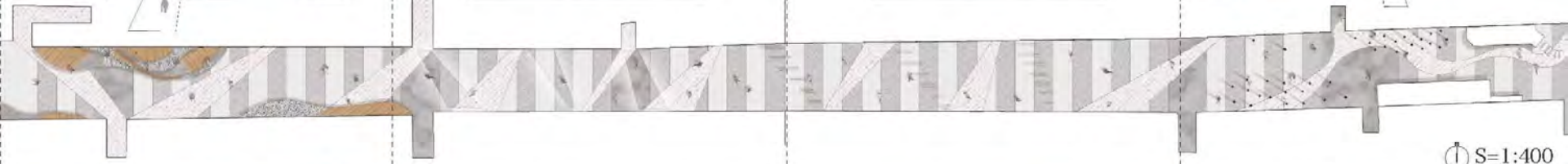
広告がプリントされたカーテンが動線を横切るように連なり、柳のように風を可視化する。地下の風の流れは、人の動きによって生み出される。揺れるカーテンはその時々の時の空間を生み出す。

カーテンが揺れる隙には人はいないが、風の気配だけが流れ、揺れに気づきふと立ち止まるきっかけを与え、情報と出会う空間となる。

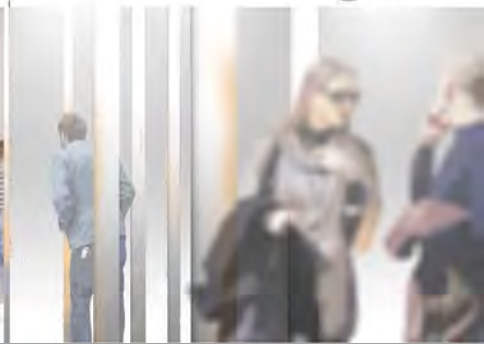
河原町通り

河原町は川のせせらぎに人が集まり、その流れに沿いながらパーソナルスペースを求める。そんな鴨川沿いで見られる風物詩は夜でも見られる。到着する人を待つ人々は、自身のパーソナルスペースを求め、壁や柱に寄りかかる。

点在する柱と流れるテクスチャによってこの駅での人の流れと場所を形成するとともに、鴨川沿いの滞留と流れ、川床下の柱の風景を抽象的にイメージさせる。また、この柱には温度によって色の変化する塗装を施し、もたれ掛かる人が立ち去った後の気配を生み出す。この場所は人々の出会いの風景を醸成する空間となる。



S=1:400

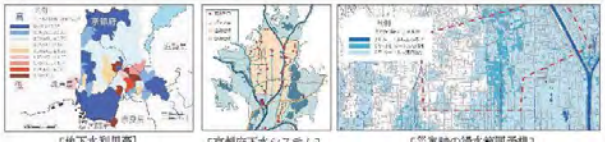


上京新八景 水の響を洛城に興す

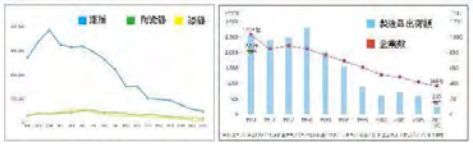
京都は水の都市であった。豊富な地下水によって、様々な文化が発展し、京都特有の生活を生み出してきた。街を歩けば、水の流れる音、機を織る音、手水鉢から落ちる水の音がどこからともなく聞こえてきた。しかし近代化とともに、伝統産業は衰退の一途をたどり、人々の生活と水の関係は薄まりつつある。

そこで、私たちは、水との関わりを持つ独自の生活風景を、新京都八景として定義し、まち全体に展開させていく。五感で水を感じながら京都の生活に思いを馳せる、京都の新たな楽しみ方を提案する。

1 京都の水に関する分析



2 伝統工芸産業の推移



他方と比較して、地下水が豊富である一方で、近代化した地域は、かつての雨水の地下浸透が失なわれた上で同時に、下水処理や雨水の排水など、ホイシフラに問題を抱えるようになった。

3 京都観光地分布

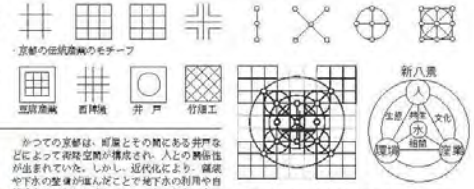
対象地である上京区は、大きな神社や寺院、庭園がないため、観光地化されていない一方で、京都らしさを残す観世近郊の暮らしが営まれており、京都文化の特徴であるコモンとしての「庭」に価値を見出できるポテンシャルを持つ。

4 町の景観変化

かつての京都は、町屋とその間にある井戸などによって街路空間が構成され、人との関係性が生まれていた。しかし、近代化により、舗装や下水の整備が進んだことで地下水の利用や自然排水はげわれなくなっていった。また、産業の衰退により伝統的な町屋の住み手が減り、空き家空き地が増加していった。

そこで、道路網と空き家・空き地において、雨水の地下浸透を復活させることで、街路全体に水の流れる雰囲気をもたらす。

5 コンセプトダイヤグラム

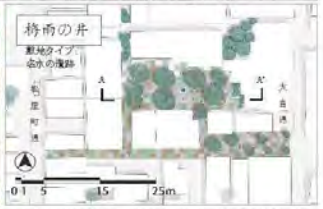


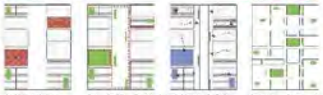
京都の生活は、水との関わりの中で存在している。茶道などのものづくり産業により文化が育くまれ、水を通した環境との繋がりから持続的な生活がつくられる。

6 提案のストーリー

場所ごとのポテンシャルを生かして産業を守りながら様々な水の楽しみ方を提案する。

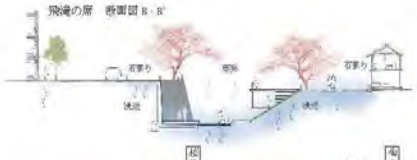
7 新八景の提案

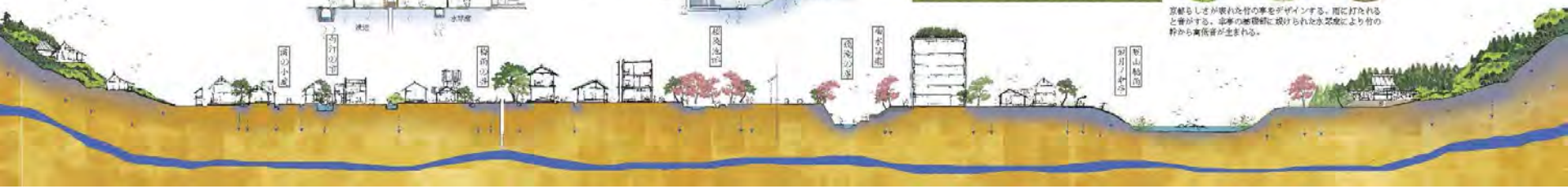




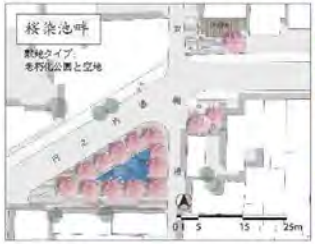
屋根からの雨水を下水道に流さず、溝の小庭または貯水性舗装（石畳）へ導入する手法。点在する小さい雨庭のネットワークによって合流式都市下水システムを改善する。

古くから名水とされている梅雨の井を再生する。井戸の周辺に大きさの違う水琴窟を配置することで、対象地に重層的な音を響かせる。また、汲まれた人が井戸から汲んだ水を水琴窟に流し込むことで、人の活動を通した新たな水環境を生む。

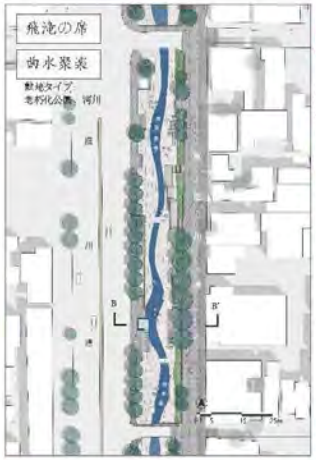




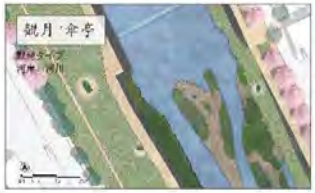
周辺には茶屋や食や小料理屋などが広がっており、非常に活気のある場所である。しかし、オープンスペースがなく、人の溜まりが生まれない。そこで、空き地を雨水性のある応棒とすることで、水との触れ合いを通して周囲の賑わいを伝承・継承していく。

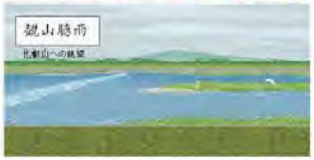


暗く利用しにくい桜さくら公園に、分断周辺部の整備により、明るいパブリックスペースや産業伝統の特性を供する。池底の舗装の厚みの違いにより水の色を変化させ、古くからこの地域で発展してきた西陣織産業の文化を抽象的に表し出す。



道路との関係が分断されている桜川の護岸部分に設けを加えることで、水を通した人の集まる場を創出する。東岸は、斜面にテラス状の空間を差し込むことで、道路からの人の溜まりを出む。一方で西岸は、敢えて護岸の大段りから敷地の水を通じて涼し、夕のみに開かれた憩い空きのある場を創る。





日本庭園の借景の思想を取り込む。堂尻川の大らかな流れとその奥の比叡山を見つめ、人々に憩いを与える自然への畏敬の念を抱く、観月と観山の景を提案する。

京都らしさが現れた竹の音をデザインする。雨に打たれると音がする。非常の感覚に設けられた水琴窟により竹の幹から高低音が生まれる。

Singularity- 京都という小宇宙 -

「京都は時間が止まっている」
京都は三山に囲まれ、さながら都市の庭のようであり、庭は小宇宙とも呼ばれるように人々の意識の遥か先を行く。
宇宙には時間が止まっている場所がある。
それは、特異点 - ブラックホール - だ
京都にも時間が止まっている場所がある。
京都に誕生した寺社仏閣・庭は、あの日から変わらず在り続け、時間を止めた因子 - 特異点 - であるといえる。人々はそうした特異点を求めて訪れている。
しかし、現代において新たな特異点を創造することは容易ではない。
京都の持つ文化・交通・場所性を紐解き、都市部における接合点 -Node- において時間を止めるほどの大きな力を持つ特異点を生み出すことで進みゆく京都の時間を操作する。

特異点

京都における寺社仏閣・庭は必然性を持ち続けた空間で、現代にまで継承された空間である。ブラックホールのように「時間を止める」存在として、京都の時間を操作し人々に必要とされるランドスケープ、京都における特異点をデザインする。

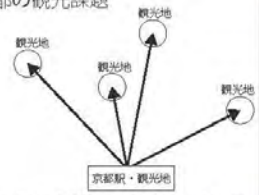
庭の力

日本庭園は世界の様々な庭園様式の中で、その形態と使われ方において特殊である。特異点は従来の鑑賞を旨としたものではなく、コモンという概念を取り入れた庭として位置付ける。

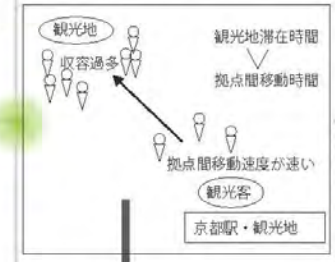
京都の現状

京都が抱える課題は近代化が進むにつれ深刻化している。急速な都市化や建物の過密化、観光地の一極集中などが具体的な例として挙げられる。特異点によって課題の解決につなげ、将来の都市機能の維持、向上を目指す。
寺社仏閣・庭を中心とした観光地に人が一局集中し、混雑によって本来の魅力が低下している。

京都の観光課題



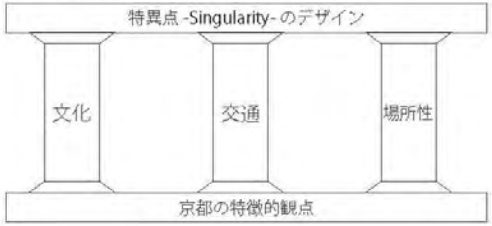
京都における観光客の移動パターンは、京都駅および観光地から観光地へと向かう傾向にある。



特異点を活用した
時間のデザイン

京都における３つの柱

京都の持つ特徴を活かしたデザインにするために、文化・交通・場所性の３つの特徴的観点を取り入れ、京都が抱える課題の解決につなげる。



文化

京都は平安時代から続く千年の都である。
京都には多くの文化財が現存し、現代の街並みのなかに当時のまま残る文化財は京都の時代の変遷を映した象徴である。

交通

電車・バス・歩行者・自転車といった人間が動く空間、京都における移動の管理、渋滞の解消のデザイン。効率的な移動から、京都の持つ特異点をつなぐ役割果たす。

場所性

三方を山々に囲まれた京都は、さながら庭と似たような自然環境と構造をもち、京都自体が大きな庭であると見て取れる。

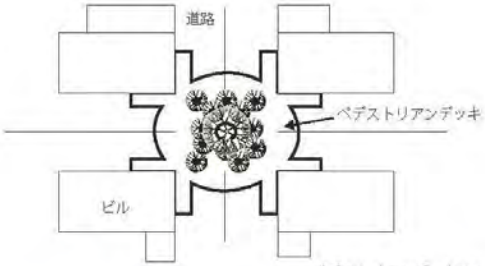
特異点 -Singularity- のデザイン

ペデストリアンデッキ - 公共空間のリノベーション -

現在の京都は、寺社仏閣・庭を中心とした観光地が非常に混雑している。
人々で賑わうことは経済や街の活気に良いが、寺社仏閣・庭の持つ厳かさや緻密さといった本来の魅力を感じることが難しくなっている。
そうした現状を踏まえ、一定の観光地に一極集中する現在の観光状況に対して、都市全体での利用空間を増加させ、京都を訪れる観光客の分散を図り観光地の混雑解消につなげる。ペデストリアンデッキでは、バスの停留所としての機能や通行人が休めるオープンスペースとしての機能を併せ持つ。

ペデストリアンデッキのデザイン

ペデストリアンデッキとは、都市の十字路（ノード）に立地し広場と横断歩道橋の両機能を併せ持つ。都市部の利用空間を複層化することにより人々が利用できる面積が増え、観光地の混雑解消につながる。



ペデストリアンデッキ平面図

空中庭園へ向かう
京都へ観光として訪れた人々の小休憩の場として、あるいは、隣接するオフィスビルで働く方々の昼食休憩の場として。
交通の要衝であるノードは多様な人々に安らぎを提供する。

3つの景

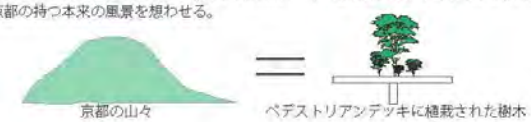
かつてより美しい風景と人々で賑わう京都であったが、現在では高層建築物が立ち並びかつての美しい風景は影を潜め、人々の賑わいは寺社仏閣・庭を中心とした観光地へ移ってしまった。そのような現状を踏まえ、都市部において新たな風景を誕生させることで、観光地を支える都市部となるよう3つの「景」をデザインした。

創景 -Create-

京都を囲んでいる三山は、長い時に培われてきた京都の自然環境を形成してきた骨格である。しかし、現在では都市の近代化が進み高層ビルといった建造物によって三山を目視することが難しくなってしまった。また、都市化により緑が遠くなってしまっている。ペデストリアンデッキにおいて植物を植栽することにより、山を印象付ける緑を創り出す。ビルによって視界を奪われた現在の京都に新たな緑を生み出し京都における骨格を創り出す。

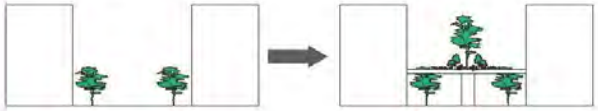
想景 -Think-

京都の緑豊かな風景は先人たちの手によって守られてきた。東山・北山・嵐山・愛宕山といった山々の緑は京都が庭の都市であることを感じさせていた。現在は高層ビルによって失われつつあるその風景を、都市のノード - 接合点 - にデザインし、人々に京都の持つ本来の風景を想わせる。



層景 -Layer-

ペデストリアンデッキによって都市空間に新たな階層を生み出す。
都市における新たなオープンスペースとして、さながら空中庭園のような景観を造る。
高さを活用した緑化によって、いままで活用しきれなかった空間にも緑を創出することが可能となる。



歩車分離

ペデストリアンデッキの持つ緑地としての効果以外に、交通においても大きな役割を果たす。道路において車両と歩行者の交錯をなくし、ペデストリアンデッキを渡る歩行者が自動車に阻害されず、事故を大きく減らすことができ、また自動車も歩行者を気にせず右左折できるため渋滞の解消に繋がる。
また、ビルに設置されているエレベーターを活用することにより、高齢者や足が不自由な方などの障壁を減らすことができ、バリアフリーな移動を可能とする。

空中に浮かぶ庭園の中で憩う
植栽マスの活用により床の厚み以上の土壌空間を確保し、荷重制限内での植栽を可能とした。さらに、中央に位置する主柱は荷重制限を意識せずに植栽できるためランドマークとなる大木を植栽する。

都市全体で時間を操作する

都市における Singularity- 特異点 - は、大規模道路におけるノード以外にも、小さな街路における緑の小空間においても生み出される。
大きな特異点ではその大きさに比例した数十分単位の長い時間の滞在を想定し、小さな特異点では数十秒といった長さの滞在をデザインする。
都市全体で特異点において「時間を止める」ことで、魅力ある観光地としての観光デザインにつなげる。

坪 - 都市の坪庭 -

大規模な道路以外の道においても特異点を構築するにあたり、京都が昔からはぐくむ「坪庭」という庭の在り方を、小さな街路の Node- 接合点 - において再現する。
地域のコミュニティにおける緑化協定や、プライベートの緑を地域に貸し出すオープンガーデンなど、多様な緑の在り方を取り入れながら、「都市の坪庭」としての風景をデザインする。